

---

# 子猫の導くままに

朧月

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

子猫の導くままに

### 【Nコード】

N6430E

### 【作者名】

朧月

### 【あらすじ】

ある日の小学校の帰り道。哀とコナンの道端ストーリー（笑）一人考え事をしていた哀は、自分を卑下してコナンと衝突してしまう。そんな一コマの、ほのぼのシリアスストーリー。（ちなみに、私の中で最もお初小説の疑いが高い、かなり古い一作ですノノノ今になって、加筆修正のみして出した、恥さらし作品><）

## （前書き）

コ哀です。私的には原作通りの哀ちゃんの片思いものですが、新蘭ORコ蘭しか受け付けない方はご注意ください。

思えば、こうして子供生活を始めてからかなり経つのね。

工藤君、あなたと出会ってから、一体どれ位経つのかしら？　こうして、あなたの横顔を盗み見るのも、大分茶飯事になったわ。あなたは知らないでしょうね。最初は凄く恨んだ。お姉ちゃんを、助けられた筈のあなたを……。新聞に写っていた、あの無力な姿のあなたが、実際とはあまりにも違いすぎたから。

「あん？　なに人の顔じろじろ見てんだよ？」  
「……別に」

半眼で振り向いた工藤君に、私はそっけない答えを返した。  
私達がどうして二人きりで居るかって？　ついさっきチャイムが鳴った帝丹小学校から帰る途中なの。皆とは少し前の道で別れて、彼とももうすぐ別れる事になるわ。

そう。この道も、景色も、随分通いなれたものね。

普段どおりの帰り道に、丁度工藤君が角を曲がった時だったわね。

「あ！」

横を見た江戸川君が、何かに気付いたような声をあげた。突然声を出すなら、もう少し声のボリュームを落として欲しいものね。反動で心臓がうるさいじゃない。

文句の一つも言ってあげるつもりで口を開きかけたけど、彼は壁に向かって突然しゃがみ込んだ。楽しそうな後姿……通行人が不審がってるわよ？

「何やってるのよ？」

「へ？ いいから、お前も見てみるよ」

ちよつと呆れながら尋ねた問いだったけど、返って来たのは弾んだ声だったわ。こつちを振り向きもしないで手招きだけしてるなんて、よっぽど興味深いものがあるんでしょうね？

「だから、何……？」

面倒くさいけど、仕方なしに工藤君の肩と壁にある隙間を覗き込んでみる。

「あ……」

驚き……違うわね、これは素直に”可愛い”と形容した方がふさわしいかも知れないわ。小さくて、雪のように真っ白な子達が、五匹……いえ、この親を混ぜると六匹ね。

つい見惚れていた私に、隣で工藤君が悪戯っぽく笑った。少しだけ不機嫌に映るような視線を送ってみたけど……ダメ、顔を戻すとまた、自然に筋肉が綻んできてしまうわ。

“ミャア”

五匹居る子猫の中の一匹から、小さくてかわいい声があがる。母猫が、その子の顔をぺろぺろ舐めている。そんな姿を見てると、私でも純粹に癒されるわ。

「あ、一匹行つたぞ、灰原」

さつき鳴いた子猫とはまた別の一匹が、どういうわけか私の足にすりよってきてる。とくん、と胸が高鳴る音が聞こえる。野良の筈なのに、随分懐っこいのね。

しゃがんで、子猫の頭を撫でてあげているうちに、自然と口元が綻んでいったわ。さつきまでのどす黒い感情なんて、消し去ってくれるみたい。

フツと息をつく音が耳に届いた。隣を見ると、江戸川君が私を見て微笑<sup>わら</sup>っている。見透かしたような目が、少ししゃくに障る笑みではあるけどね。

「可愛いだろ？ 実は昨日見た時はまだ生まれてなかったんだ。母猫の腹が大きい状態だな。今朝はもう居たみてーだけど、まだ生まれて間もない仔猫だぞ」

明るい口調で彼は言ったけど、私の世界は少しだけ曇ったわ。生まれて間もない仔猫って言葉の何かが、私の心にある闇をつついた気がしたのよ。

そうね、わかってるわ。この子は、生まれたばかりのまっさらな存在よ。見た目も心も、こんなに真っ白な子猫……そこに、私みたいなけがれた存在<sup>くろね</sup>が近づいてしまつてよかったのかしら？

私が犯した罪の重さ位、判ってるわ。江戸川君……あなただって、その被害を受けた一人なのに。そんなあなたを、ずっと恨んでいたのよ。

だから、目の前であなたが屈託なく笑う程、責められている気がする。

しばらく俯いていたけど、彼は突然私の前にしゃがみ込んだ。

「……どうした？」

「どうもしないわ。通りがかる人が構いすぎたのかしら。警戒心が  
まるでないわね、この子達」

彼の心配そうな問いへの、精一杯の皮肉を込めた言葉のつもりだ  
ったわ。冷たく笑ったつもりだから、江戸川君がまたどんな呆れた  
反応を返してくるのかと思ったけど……

「警戒心ならあるに決まってるんだろ。けどそいつはおめーが好きな  
んだってさ。よかったな」

予想もしてない言葉を言われたら、ただ目を丸くするしかないの  
ね。

「……何言ってるの？ 好き嫌いなんてこんな子達にあるわけない  
じゃない。ホラ、現にあなただって充分懐かれてるみたいだし」

ちらつと江戸川君の手元を見たけど、ハーレムみたいに子猫が群  
がっているじゃない。

「……そう思うか？」

「え？」

耳に聞こえるか聞こえないかぐらいの声が、私の耳に届く。聞き  
返すと、江戸川君の腕の中に居た子猫を突然渡されたわ。

「一体何よ」

彼のよくわからない行動に、私はただ手を出してその子を受けと  
っただけ。何の抵抗もなくやってきた子猫が、やはり無警戒過ぎる  
気がしてならないけど。私の腕に移動した子があまりに懐っこくす

り寄るものだから。可愛いじゃない？ 思わず抱きしめて頬をすり寄せたわ。

「で、この子は何なの？」

行動の意味も言わずに、私と子猫を交互に見つめてる彼に、少しイラついたわ。だから、ちょっと強めの口調で質問したの。そうしたら、彼はあの余裕たっぷりの不適な笑みを顔いっぱい貼り付けて……何よ、じれったいわね。

「見てみるよ」

静かに呟いた彼の言葉に首を傾げたけど。彼、今度は突然私の足にまとわりついてた最初の子猫に手を伸ばしたわ。抱き取るうとして。

「……え？」

この子、私から離れないわ。江戸川君の手から逃げるようにして……  
何が起きてるのかなんて、判らない。江戸川君の手が届くと、にう、なんて小さい声を上げて足をじたばたさせてる。

「ほらな」

「……」

「おまえと離れたくないんだって。分かるんだよ、お前の側が居心地がいいって」

「うそよ……」

信じられないわ。目の前の現象が、信じられるわけじゃないじゃない。



彼の優しい響きの言葉も、私の胸に染み入ってくるけど。

動物は好きよ。勿論、子猫なんて凄く大好き。懷かれて嬉しくないわけではないわ。でも。

こんな薄汚れた私だけに懷く猫なんて居ていいものなの？ 今だって、私の薬は彼らによつて、人を殺すために使われているのよ。けど、私だけ何の罰も受けずに安穩と生活してる。

お姉ちゃんみたいな、優しい人でさえ殺されたのに。

まわりついて来る暖かい猫の体温が、今の私がどれだけ平和な中に居るか教えてくる。こんなまつさらな、何も知らない子が、人間の心も見抜けずに寄ってくるなんて。

「無理して、私と一緒にいてくれなくてもいいのよ」

子猫をじつと俯いて見てたら、無意識だったけど、そんな科白がつい零れたわ。そうしたら、向かい合う彼の顔が呆れた表情に変わって……彼の口から、随分大げさな溜息が零れたわ。

「何言つてんだよ、さっきの反応見ただろ？ そいつはお前と一緒に居たいんだって」

「……違うわよ、あなたの事よ」

「俺の事？」

すっかり耳に私の声をキャッチしたみたいで、彼の言葉が少し荒くなって、彼の眉間にはしわが寄ったわ。いつそ聞こえなければいいと思って、口の中ではそつと言った科白なのにな。

聞こえてしまったら、仕方がないのかしら。

俯いて、言つていいものかどうか一瞬迷ったけど。気がついたら、

口が開いてた。

「あなただって、被害者じゃない。私の薬の」

「あん？」

「全く恨んでないとも言うの？ あなたの身体を縮めて、そのせいであなたは好きな人にも正体を隠さなきゃいけなくなったのよ。その身体のせいで、あなたがどれだけ苦労してるかくらい知ってるつもりよ」

言いづらい科白ではあったけど、案外第一声が出るとせきを切ったように出てくるものね。

江戸川君……あなたは多分、私を恨んだりしてないわ。その位、判ってるつもりだけど。でも、あなたわかつてる？ そもそも私が組織に居なければ、あの薬がこの世に存在する事もなかったのよ。そうすれば、あなたは今頃元通りの姿で、あの彼女と一緒に……。お姉ちゃんだって、私を組織から抜けさせたいと思って手を染めてなければ。

あなたの世界を奪った私を、最初は理解できないって怒鳴ったじゃない。

「そう、そもそも私っていう科学者が居なければ。生まれて来なければ、あなた達もお姉ちゃんも、苦しまずに済んで、」

「ふざけんな！」

彼の突然の怒鳴り声に驚いて、続く科白を飲み込んでしまったわ。さつきと変わって凄く怒った顔が私を睨みつけてる。

「生まれて来なければなんて言葉言うんじゃないよ。おめーの母さんが、どんな想いであのテープを残したか、おめーの姉さんがどんな想いでおめーを組織から抜けさせようとしてたか。それがわかん

ねーのか？」

最もな事を言われてるのかも知れないけど。少しだけ彼の言葉にむっとしたわ。赤の他人のクセにつてね。

「それでも私は色んな人を不幸にしてきたのよ。あなただって、最初そう言っていたじゃない！」

私の正体を知ったあなたは、私に一番痛い所を指摘したのよ。考えなかったわけじゃない。毒を作ってるつもりじゃなくても、私の薬がそう言う事に利用されてるって知ってたもの。

「染み付いた罪は、そう簡単に抜けないのよ。あなたがあの時言っただように、私の作った毒で一体どれほどの人が不幸になったか。考えた事がないわけじゃないわ。そう、今ももしかしたらどこかで私の薬が、暗殺のために……」

私、声が震えてるわ。敢えて考えないようにしてる事だけど、想像するとどれだけ怖いかな。工藤君、あなたに想像できるの？ 手を汚した事なんてないあなたに。

工藤君は、口を結んで目を据わらせて私をじっと見つめていた。その口からどんな言葉が出てくるのか、最初少し怖かったけど、もう覚悟は出来てるわ。いつそ、中途半端に慰められるぐらいなら、思い切りののしられた方が……

「確かに、そうだよな」

彼の口から漏れた低い声に、肩が震えた。私はそっと抱いていた子猫をおろし、しゃがんだまま彼の言葉の続きを待ったわ。無意識

的に、震えてしまうこぶしをきつく握り締めて。

「オレだって、おめーの事知らないうちは、薬を作った奴が憎かったよ。こんな身体にさえならなきゃ、あんなに蘭を泣かせる事もなかったんだ」

直視するには辛い真実をまっすぐに伝えてくる。でも、これは私の犯した罪の報いなんだから、ちゃんと受け止めないといけない事よ。

私は目を閉じて、小さく深呼吸をしたわ。

「ほら見なさい。やっぱりあなただって、本音では……」

「最後まで聞けよ。オレはな、そこまで嫌いな奴に必死で尽くして守ってやるほど、お人よしでもねーんだよ。そりゃ、事情は事情だろーから形だけ匿ってても、んな優しくするわけねーだろ。おめーが実際付き合ってみて、いい奴だって判ってるから一緒に居るんじゃないか」

「あら、フオローのつもり？」

敢えて腕を組んで、クールを装って江戸川君に笑って見せた。けど、彼は「ちげーよ」なんて首を振る。

「おめーが作った薬が、他の奴を苦しめたって事実まで、フオローしてやる気はねえよ。少なくとも、オレはおめーの事嫌いじゃねーし、許してるつもりなんだよ。もしかしたら、おめーのあの薬があったから、命だけは救われたのかも知れねーって見方もあるしな。この身体になつて、工藤新一のままじゃ気づけなかった大事なモンも、大分判った気もするし。そういう意味では感謝もしてんだ。そんなオレがおめーの事、これっぽっちも恨んでるわけねーだろ」

どこか棘のある声だったけど、一つ一つが私の心に沁みこんでいく。あなたに出会ってから、思い出の一つ一つが私を作ってく。あなたに言われた言葉が、今までどれだけ私の勇気に変わったかしら。意味もなく優しいだけの言葉じゃないから。工藤君、あなたの言葉はいつもいつも……

「私は……」

声が震える。視界が、ぼやけてく。あんまり泣き顔なんて、見られたくないのに。特にあなたの前では、涙なんて流したくないのに。止まらないわ。最初にあなたと会った時みたいに、止められないで零れてく。

彼がポケットから取り出したハンカチを受け取って、悔しくて顔をそらした。

「わりい、言い方きつかったか？」

「違うわ。あなたのクサイ科白に、少し感化されただけよ」

頭をかきながら謝られて、ついツンとした返事を返してしまう。私も、まだ青いわね。

「あんだよ。素直じゃねえ奴」

工藤君が大げさに溜息をついて、また半眼の呆れ口調で呟いた。悪かったわね、素直じゃなくて。と返したくなっただけど、たまには、素直になっておくのもいいかしら。

少しだけ間をおいて、涙を拭って視線をそらしたまま、聞こえるか判らない小声で彼に囁いた。

「ありがとう。私の方こそ、ごめんなさい」

届いたかどうかなんて、彼の顔を見れば一目瞭然よ。大きく目を見開いて、きょんとした顔で私を見つめてるんだから。それなのに、彼は無言のまま。

聞こえたなら、何か言いなさい工藤君。変に素直な返事したせいで、私からは何も話しだせないじゃない。

気まずい空気に、やっぱり素直にならなきゃ良かった、なんて思ってたわ。けど、私と工藤君の間にあった沈黙を破ったのは、忘れてた予想外の存在よ。

“ミヤア”

突然足にふかふかしたものがすりついてきたの。私も工藤君も驚いてそこを見たわ。居たのは、さっき私に妙に懐いてたあの子。甘えた声で鳴いて、足の下をくぐる可愛い子猫よ。さっき、私たちの激しい口論でいつの間に逃げてたようだけど、戻ってきたのね。

思わず抱き上げると、他の子猫達までぞろぞろ寄って来たわ。

「やだ。ちょっと……何？」

どうしようもなくて、とりあえず母猫の胸元に返すのに、またくっついてきちゃうのよ。別にコントやってるわけじゃないわ。私なりに困ってるのよ。そんな気も知らずに、隣で見てた江戸川君は吹き出して笑ってるようだけど。

「しょうがないわね……」

観念したって小さく溜息をついて見せても、内心では少し幸せを感じてるのよ。あごを撫でればごろごろ気持ちよさそうな音を出す

し、頭を撫でれば擦り寄ってくるし。私にとってはこの子たちは究極の癒しよ。顔が、ほころんでいくもの。

夕日が、私や子猫達を照らしてる。前に太陽の断末魔なんて表現したけど、こんな穏やかな時間も悪くないわ。

「灰原、おめー動物の前では嫌に態度が素直だな」

「あら、悪い？」

上から降ってくる声に、小さく笑って見せた。

「悪くねーけど、どうせならいつもそんな顔してろよ。前にも言っただろ？ そういう顔してれば子供にしか見えねーし、お前の姉さんや両親だって喜んでるだろうからな」

「……ええ、そうね。あなたの言うとおりかも知れないわ」

こんな他愛もない会話をして、時には言い合いもして、私たちがつの間にわだかまりを消していったのよね。そしていつからだったかしら。あなたの存在が私にとって、誰よりもかけがえのない大切なものになったのは。

いつからなんて判らないけど、あなたは一生気づかないでしょうね。あなたを想う私の気持ちなんて。ねえ、世界一鈍い探偵さん？ 一生、私の胸にしまっておく気持ちでいいわ。探偵事務所の彼女にも幸せになつて欲しいから。工藤君の事も彼女の事も、私は大好きだから。ただ彼が、ずっと元気であってくれる事だけ望んでいるのよ。お姉ちゃんみたいな別れ方だけはもうごめんだから。

だから、彼と一緒に居られるこの一瞬一瞬だけは、せめて私のもので居てくれれば。

「暗くなってきたし……そろそろ帰りましょ」

「ああ、そうだな」

まわりついてきてた子猫達を、今度こそ母猫に帰して、工藤君と二人で立ち上がった。後ろに、子猫達の暖かい視線を感じながら。

お姉ちゃんが天国で見てたとしたら、今の私たちをどう思うかしら。

“ミヤア……”

私の気持ちに伝えるように、小さな鳴き声が最後に耳に届いた気がする。気のせいだと思うけどね。

『見守ってるから、どうかずっと、幸せでいてね』





## （後書き）

こんにちは……ってか、何を血迷った私！（滝汗）

朧月の、（多分）お初小説。

恥ずかしい、恥ずかしいよ恥ずかしい恥ずかしいっ／＼／／／

とりあえず、こんなお話を最後まで読んで下さってありがとうございます！  
いますゝゝく

言い訳、させて下さい（涙）お願いっ。

そもそも、完全にお蔵入り状態だったコレを、わざわざ加筆修正までして出そうと思ったのは、あまりにお待たせしてしまったって懺悔からで。

私には珍しい、一話完結ストーリーで、私には珍しい、コナンが無事なまま終わる話で。

なので、本人的には意外と気に入ってる部類でもあります（＾－＾；  
てか、一コマって言う割には長げーぞこの話！

最初に書いた小説の記憶って曖昧なんです私。同時期にとっとくさん書いたから。

でも、コレが多分最も古いお話だと思う。私の記憶の中で、最有力候補です。

その為、哀ちゃんのキャラも古かったりする（＾－＾；

でも、古い事を考えたとしても、こんなに後ろ向きでもない気がするけどね、哀ちゃん。

ストーリーや台詞回しだけ当時のまま、文章は大幅に改稿しました。（あ、でも台詞は時代を意識してちょっと変えたかな。お母さんのテープとか）

大幅に改稿したとはいえ、コレだけ古い小説に手を加えるのは結構難しかったのよ。当時の自分の意図がわからずに。まさかの一人称に戸惑ったよ。やっぱり、あんまり得意じゃない。一人称。ストーリー的に、相当未熟ですよな><ごめんなさい。

このお話は、コナンを思う哀ちゃんの気持ちを全面に出したかったと言うか。哀ちゃんの片思いものって昔から大好きなんですv

哀ちゃん自体が大好きだからね。切なくて、きゅーんと来るような……え？ 私の話じゃこないって？ 悪かったなっ（ノー>。）ビエエン

そして、哀ちゃんに纏わりついてた子猫。ちょっぴり裏設定を狙ったのですが、私の考えにどれだけ気づいてくれた方が居るかどうかが最後のどこから聞こえたんだか判らない科白も。

ああああ、もうホント恥さらしノノ反応が恐ろしいです><で、でも、五年以上前（多分）に書いた小説の『し』の字も知らなかったうつけ者のやらかした事だと思って、今回ばかりはコメントお手柔らかにお願いしたいです><言いたい事は色々あるかも知れませんが。

反応怖い〜とびくびくしてる私に免じて><願わくば、心温まるストーリーであつたなら幸いですv

それでは、朧月の恥さらし的な原点をお読み下さって、どうもありがとうございましたv

こんなお話ですが、少しでもお楽しみいただけましたでしょうか？><

または非、他の作品でもお会いできたら幸いですv

ああああ、ドキドキドキ><私のお話好きですとか言って下さって

る方が、幻滅だーと思ったらどうしよう><（恥）

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6430e/>

---

子猫の導くままに

2010年10月8日23時48分発行